

死の脅威が自己の仮説妥当性評価にもたらす影響：存在脅威管理理論から考える仮説検証課題のプロセス

The Impact of Death Threats on Self's Hypothesis Validity Assessment: The Process of Hypothesis Testing from Terror Management Theory

柴北 春香[†], 服部 雅史[‡], 平田 瑞貴[†], 三輪 和久[†]
Haruka Shibakita, Masasi Hattori, Mizuki Hirata, Kazuhisa Miwa

[†]名古屋大学, [‡]立命館大学
Nagoya University, Ritsumeikan University
shibakita.haruka.b4@s.mail.nagoya-u.ac.jp

概要

この研究は、存在脅威管理理論の文脈における死の脅威が自己の仮説妥当性評価にもたらす影響についての検討をおこなったものであった。人間は、他者のアイデアや仮説などを懐疑的に評価するのに対して自分の仮説やアイデアを肯定的に見積もる傾向がみられる。本研究ではその原因を存在脅威管理理論における死の脅威にあると仮説を立てて仮説検証課題を用いてこのことを検証した。実験結果は有意な差がみられなかった。

キーワード：存在脅威管理理論, 仮説検証

1. はじめに

問題解決場面において、人は他者の仮説は懐疑的に評価するのに対し、自分の仮説は肯定的に評価する傾向がある[1]。その原因は、単純所有効果 (mere ownership effect; 以降 MOE と呼ぶ) とされている。これは、ある対象を自分のものと認識することで、その対象を肯定的に評価するようになるという効果のことで、肯定的な自己像を維持したいという自尊感情に起因する[2]。MOE は自分を否定されるという自己脅威を感じている場合に強くなる[3]ことから、肯定的な自己像を維持したいという自尊感情には、自己脅威からの防衛という役割もあると考えられる。また、人間は死の脅威を潜在的に感じることで自尊感情が増すという存在脅威管理理論[4]によれば、自己脅威の最たるものである死の脅威が顕在化すると、自尊感情が高まるとされている。

以上より、自分が生成した仮説を検証する際に、死の脅威が顕在化すると、自尊感情が高まり、その結果、自分の仮説を肯定的に見積もることが起こる可能性がある。そこで、本研究では、仮説検証課題を用いてこのことを検証した。

死の脅威の喚起は人為的に、自分はいつか死ぬということに対する恐怖である存在論的恐怖を感じさせる

処理である MS 処理 (mortality salience 処理) を用いた。MS 処理により、仮説を肯定的に捉えるようになると考えられた。実験では 3 つの指標について分析をおこなった。

1 つ目は正事例検証と負事例検証の出現率であった。正事例検証とは仮説検証過程において仮説に合致する事例を用いて検証すること、負事例検証とは仮説検証過程において反証となる事例を検証することである。MS 処理によって自分の仮説を肯定的に見積もるようになれば、ため、確信度を高める必要性が少なくなるため、検証過程の終盤で確信度を高めるために出現が高まるとされている[5] [6]負事例検証の出現が少なくなると予測する確信度を高める必要性が少なくなるため、負事例検証の出現が少なくなると予測した。

2 つ目は試行回数であった。MS 処理により、仮説を肯定的に捉えると、生成した仮説に対する確信度が高まり、また、検証回数に比した確信度の上昇速度が高まると考えられるため、一定の確信が得られた参加者は仮説検証を終了しても良いという実験手続きをとった場合、仮説検証過程における試行回数は少なくなると予測した。

3 つ目は主観的な確信度である。実験群では MS 処理によって自己生成仮説を肯定的に捉えると考えられるので、主観的な確信度が高くなると予測した。

2. 方法

参加者

日本で生まれ育った大学生及び大学院生 30 名(平均年齢 22.3 歳)が実験に参加した。参加者は、実験群または統制群のいずれかに無作為に割り当てられた。

装置

実験はオンラインコミュニケーションツール Zoom を用いて実施した。実験中、ビデオはオフにした。

手続き

実験群は MS 処理として死生観を問う質問に、統制群はテレビ視聴に関する質問に回答したあと、両群とも存在脅威管理理論における自尊心向上を検証するために作成された尺度である自尊心向上希求度[7]をはかる質問紙に7件法で回答した。この尺度は Rosenberg (1965)の自尊心に関する尺度[8]及びその邦訳版である山本・松井・山成(1982)の尺度[9]の項目表現をいかしつつ、かつ自尊感情を高めたいという欲求を測定できるような表現に修正したものであった。その後両群ともエリューシス課題という仮説検証課題を解いた。エリューシス課題とは、実験者があらかじめ決めた規則(今回は数字が書かれたカード、つまり2~10までのカード)を発見するという課題であった。まず参加者は52枚のトランプを持っているとした。そして実験者からハートの3、スペードの5、ダイヤの7が規則に合致する初期事例として提示した。参加者はそれぞれの試行で規則の仮説を1つ提示して、仮説を検証するために同時に任意のカード1枚も提示した。この時に提示したカードが正事例か負事例かを記録することで1つ目の確信度の指標とした。実験者は参加者の提示したカードが規則に合致するか否かをはい・いいえでフィードバックした。参加者はフィードバックをもとに新たに規則の仮説をたてることを繰り返した。この試行は、参加者が正しい規則を発見したと確信するまで続けることで、試行を続けた回数を2つ目の確信度の指標とした。

仮説生成後、参加者は、生成した仮説の正しさに対する主観的な確信度を0%から100%の間で回答することで3つ目の確信度の指標とした。

3. 結果

自尊心向上希求度は、MS 処理群の平均値は5.62、統制群は5.44で有意差はなかった(図1)、 $t(28) = -0.42, p > .05$ 。試行回数の平均値は、MS 処理群では14.4回、統制群では15.4回で、両群の間に有意差はなかった(図2)、 $t(26) = 0.34, p > .05$ 。エリューシス課題の全試行に対する負事例検証の割合は、MS 処理群では0.33、統制群では0.31で、両群の間に有意差はなかった(図3)、

$t(23) = -0.11, p > .05$ 。自分が生成した仮説に対する主観的な確信度は MS 処理群で37.0%、統制群の平均値は43.8%で、両者の間に有意差はなかった(図4)、 $t(25) = 1.09, p > .05$ 。

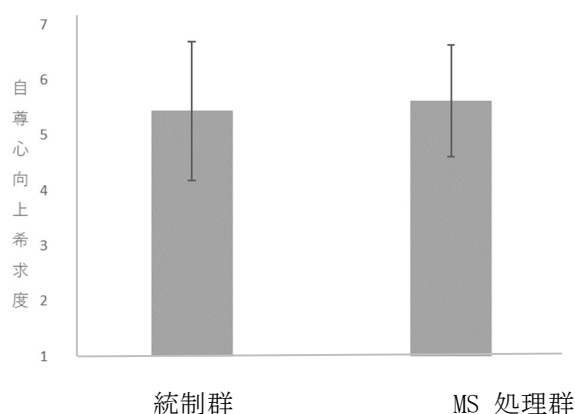


図1 自尊心向上希求度

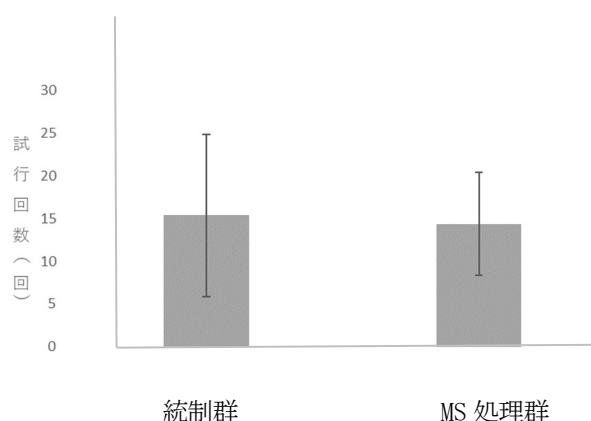


図2 エリューシス課題において正解を見つけたと思うまでの試行回数

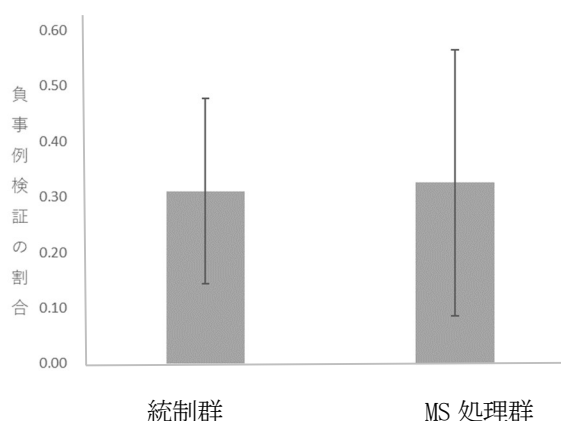


図3 エリューシス課題において負事例検証をおこなった割合

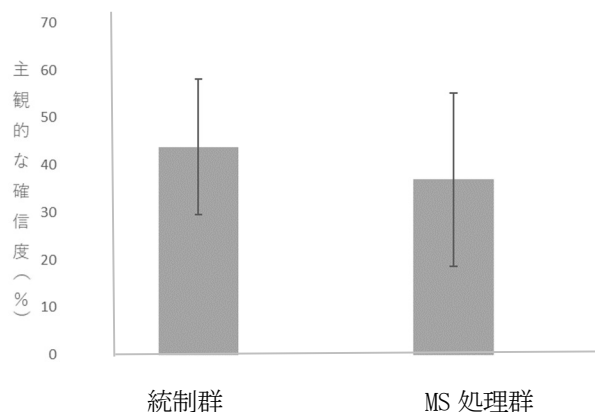


図4 エリユーシス課題における主観的な確信度

4. 考察

本研究では、存在脅威管理理論の文脈における死の脅威が仮説妥当性評価にもたらす影響について検討した。その結果、MS 処理によって自尊心向上希求度が向上しなかった。

その原因として実験に Zoom を用いたことがある。日本的な価値観が強い日本人は MS 処理をおこなうことで謙遜を美德とする東洋的な文化的世界観に接近し、自己卑下的な態度になると言われている[10]。しかし他者を感じない環境においては日本人も自己評価が高くなるという結果がみられている[11][12]ことから、MS 処理をおこなっても他者を感じさせない環境であれば自尊心向上希求度が高くなると考えられる。今回の実験では Zoom の画面をオフにすることで他者（実験実施者）を感じさせない環境を設定したが、不十分だった可能性がある。

今後は、両群の自尊心向上希求度に差が出るよう実験手続きを改善した上で、MS 処理が仮説検証過程へ及ぼす影響を確認する必要がある。

文献

- [1] 小寺 礼香・清河 幸子・足利 純・植田 一博 (2011). 協同問題解決における観察の効果とその意味：観察対象の動作主体に対する認識が洞察問題解決に及ぼす影響 認知科学, 18, 114-126.
- [2] Beggan, J. K. (1992). On the social nature of nonsocial perception: The mere ownership effect. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 229-237.
- [3] Yeung, V. W. L., Chan, C. P. Y., Yau, E. K., Lok, W. K., Lun, V. M. C., & Chan, E. (2020). I own therefore I can: Efficacy-based mere ownership effect. *Journal of Experimental Social Psychology*, 90, 104005.
- [4] Solomon, S., Greenberg, J., & Pyszczynski, T. (1991). A

terror management theory of social behavior: The psychological functions of self-esteem and cultural worldviews. *In Advances in experimental social psychology*, 24, 93-159.

- [5] 眞嶋良全 (2008). 仮説検証における事例選択の変化 認知心理学研究, 6, 57-63.
- [6] 田村昌彦・服部雅史・三輪和久 (2010). 仮説検証課題における確信度更新と検証系列：情報獲得モデルによる検討 認知科学, 17, 180-195.
- [7] 富塚 澄江・藤 桂 (2017). 死に対する恐怖および回避が健康行動に及ぼす影響 心理学研究, 88, 327-336.
- [8] Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- [9] 山本 真理子・松井 豊・山成 由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.
- [10] Wakimoto, R. (2006). Mortality salience effects on modesty and relative self-effacement. *Asian Journal of Social Psychology*, 9, 176-183.
- [11] Kudo, E., & Numazaki, M. (2003). Explicit and direct self-serving bias in Japan. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 34, 511-521.
- [12] Kim, Y., Chiu, C., Peng, S., Cai, H., & Tov, W. (2010). Explaining East-West Differences in the Likelihood of Making Favorable Self Evaluations: The Role of Evaluation Apprehension and Directness of Expression. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 41, 62-75.